

GATE～覇と碎と骸 彼の  
地にて、斯く暴れり

中タル爆弾

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

気まぐれでなんとなく書いて見ました！続くかも分からない上に更新ペースが遅くなると思いますが、それでもよければ是非見ていって下さい。ちなみに、この作品は、ゲートの世界にモンハンのアカムトルムと臨界ブラキディオスにオストガロアを入れたらどうなるかな、と考えて書いた作品です。因みに、タイトルには「斯く暴れり」と書いてありますが、本当に暴れるのは時と場合によってなので、結構多いわけでもないです。

# 目次

|                    |   |
|--------------------|---|
| お話の前にちよつとした作品紹介&モン |   |
| ハンから来るキヤラ紹介        | 1 |
| 第1話〜3匹、特地向行く〜      | 4 |
| 第2話〜特地向にて〜         | 9 |



# お話の前にちよつとした作品紹介&モンハンから来る キヤラ紹介

突然だが、貴方は『龍大戦』というものを知っているだろうか。モンスターハンターという世界が成り立つよりも遙か昔、現代を超える文明の中生きていた人々と数多の竜によつて引き起こされた、歴史上最も大規模で、最も凄惨な終わりを迎えた戦争。なのに、未だそれに関する文献は両手で数えきれるほどしか発見されていない、謎に包まれた出来事である。その龍大戦は、人類と龍共に当時存在していた数の9割以上を失つて終わりを迎えた。これは、そんな龍大戦を終わらせたといわれる7体の龍の内3体が、『ゲート』という異世界への門を通つた先にある『特地』で様々な者と出会い、暮らしていくお話である。

〜ここで登場する龍の紹介（少し古代の文献に載っている感じで）〜  
一体目

其の竜、異常なまでに発達した甲殻を持ち、いかなる武器も弾き返す。

其の竜、凶悪な牙と爪で、いかなる防具も容易く貫き、切り裂く。

其の竜、咆哮で火山を噴火させ、特殊な声を放ち、その声に当たれば、いかなるもの

も消滅する。

其の竜、又の名を『黒き神』『覇竜 アカムトルム』

其の竜に挑むことなかれ、逆鱗に触れることなかれ。

それでも尚彼の竜に挑み、そして打ち倒すことができたのならば、その者は英雄として、永久にその名を刻まれることだろう。

二体目

其の竜、火山の奥地に存在している洞窟を抜けた先にある、溶岩に囲まれた島で生息している。

其の竜、元の個体の突然変異で、頑強で緑がかった甲殻、その腕と頭部には黄色がかつた粘菌が付いている。

其の竜、原種を圧倒するほどの力を持ち、また粘菌も異常なまでの爆発力を誇る。

其の竜、その圧倒的な強さから『臨界』と謳われる。

其の竜、名を『砕竜 ブラキディオス』。

しかし、たかが砕竜と侮るなかれ。彼の竜に覚悟を持たずして挑むならば、その者は彼の竜の拳と粘菌により、秒を数える前にその命を砕かれるだろう。

三体目

其の龍、数多の竜の骨を身に纏う。

其の龍、無尽蔵な食欲を持ち、数々の竜を捕食した故に、膨大な量の龍属性エネルギーを持つている。

其の龍、普段は地の中に身を沈めており、姿を見せることは滅多にない。

そのため、龍とは名ばかりで、その正体は不明である。

その龍、又の名を『奈落の妖星』『骸龍 オストガロア』。

もし彼の龍に挑んだのなら、その者は圧倒的な龍属性の力により声を出す間も無く消し炭になるか、喰われて彼の龍の一部となってしまうだろう。

三体の竜、それぞれが共存関係を持って生きている。

人語を解し、また話すこともできる。

寿命による死が存在せず、病にもかかると言われる。

本気の祖龍をもいとも簡単に地に伏せさせる実力を持っている。

しかし、人類という愚かな存在が三体の竜の内どれか一体の逆鱗に触れたなら、人類は滅亡の道をたどることとなるだろう。

## 第1話～3匹、特地へ行く～

よう！いきなりの挨拶で悪いな。俺はアカム。名前でわかるようにアカムトルムだ。本当だつたらもう本題に移りたいところなんだが、今ここには俺含め合計3人(匹?)いる。だからそいつらの紹介もしなくちゃな。まず1人目。オストガロアのオストだ。多分この中で一番年長じゃないか？確かもう4桁は生きていたはずだ。それでも「まだまだ若い方だ。」とか言ってたな。・・・あいつの一族の平均寿命どのくらいなんだ？よし、今度聞いてみるとするか。

おっと、話がずれたな。じゃあ2人目。ブラキデイオスのブラキだ。こいつは3人中で一番真面目で一番若い。それでも300才くらいだから人間よりも長く生きてるんだけどな。ここに来たばかりの時はこの空間に慣れていなかったようだが、今ではすっかり馴染んでいる。あとこいつは苦労人(基本俺とオストが原因)な一面がある。一応ブラキとは住む場所が同じこともあり、基本一緒に行動している。オストは住む場所が違うから、週に2回くらいのペースで来てる。

そーいやあいつって寿命以外にも謎があるんだよなあ。ここからあいつの住む『龍の墓場』まで結構な距離があるはず。例えるとするならばバルファルクが全力で飛び続けて



1日ぐらいと言ったところか。それなのに週2のペースで来ても疲れる様子もないそのスタミナ。他にも、あいつのいる龍の墓場には溶岩なんて一切なく、あるのは骨と、その周りを囲むように水があるだけだ。だけど、あいつはこの溶岩ばかりの島で平然としている。何が言いたいかというところ、あいつの環境に対する適応力みたいなのが異常なことだ。

2回くらい話からから脱線しちまったかな？そろそろ本題に入ろう。信じられないことかもしれないが、よく聞いてくれ。結論から言うのだな……。

突然俺らの正面に門のような建造物が現れた。俺がこの建造物を門と言っている理由は、人間が『門』とか言ってたものに、基本的な形は違えど似ているところがいくつもあるからだ。

あ、忘れてたがブラキとオスト、ケンカで疲れて寝てたんだっけ。とりあえず起こして状況を把握してもらおうか。おい、ブラキ、オスト。

ブラキ「んん……何だーアカムー。」

お、起きた起きた。そういや言い忘れてたが俺ら3人は年齢関係なく、基本タメ口で話している。さーて、オストは……

オスト「zzz………」



ちよつとこの先に行つて見ないか？ほら、なんか別のところと繋がつてそうだしき。ブラキ「珍しいな、ほほほ引きこもりのようなお前がこんなことに興味を持つなんて。」

だまらつしやい。とにかく理由は2つだ。まず1つ目。最近ここら一帯のモンスターが少なくなっている。簡潔に言えば深刻な食料問題だから、食料調達の為だ。

そして2つ目。おそらく後数十年もすればこの島が沈むだろう。それだつたら今のうちに退避してしまへつてこと。因みに沈むのはこの島だけだし、沈んだことで周りにも影響は出ない。

オスト「理由は分かった。俺もブラキも賛成だが、行つた後はどうするんだよ？」  
そうだなー。その場のぎで？

ブラキ「なんで疑問形なんだ・・・。」

オスト「まあいい、このままここで立ち止まつても何も起こらないし、とりあえず行つてみようぜ！」

そうするか、よし、そうとなれば今すぐ出発だ！行くぞ！

「おう！」

おつとその前に、今まで住んで来たここにもお礼言つとかないとな。

今までありがとうございます！

よし、別れの挨拶も済んだことだし、ようやく出発だー！

## 第2話く特地にてく

ふう。さーて着いた着いた。さあ！まずは何したらいいと思う？俺は周辺の探索だ  
と思うな。

ブラキ「食料調達。」

オスト「拠点作りだな。」

全員バラバラだなー。じゃあ各自担当してやってこうぜー。ブラキは食料調達、オス  
トは拠点作りな。

ブラキ「分かった。」

オスト「いいぜー。じゃあやるか！」

そうしますか！

く Now loading く

よし、周辺の調査は完了だ。どうやらここら辺は森らしいな。で、少し歩くと水源、森  
を出ると草原、さらに奥に行くといくつか村があるようだ。結構いい場所にたんじや  
ないか？そーいや道中大量の荷車と緑色の車があったな。それもついでに報告しとく  
か。さーて、終わったことだし帰ろ・・・

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

なんだ!? さっきの大量の荷車があつたところだな。急いで行ってみるか!

くアカム移動中……

よし着いた! つてなんだあれ?

見た所竜っぽいな。体は赤くて……ふむ、炎を出すのか。なんかリオレウスみたいだな。

んで、基本陸では直立で活動、体格は俺と同じくらいかそれ以上……。

よし、あいつ今日の晩飯だ。

気づかれると面倒かもしれないけど、この世界の竜がどんな強さなのかも知っておきたいな。

うーん……普通に戦ってみるか!

おい晩飯い! 特大の咆哮くれてやるからこつち向けええええええええ!

よし、驚いたのかこつち向いたな。じゃあ戦闘開始!

……ん? かなり動きは鈍いっぽいな。これなら案外簡単そうだな。

後ろに回り込んで、まずはジンオウガのお手!

お? 小手調べとしてかなり手加減したとはいえ、貫通はしないか。強度はまずまずと  
いったところ。

でも今のでかなりダメージが入ったようだな。これなら強さは下位個体の古龍ってくらいか。

流石に少し時間も経ったし、もうそろそろ帰らないといけないんでな！これで決めさせてもらう！

またジンオウガのお手だが、さっきのとは違うんだな。今度のはさっきのやつにソニックブラストのエネルギーを少しばかり纏わせてる。

元のソニックブラストよりも威力は大きく落ちるが、それでもお前を仕留めるには十分すぎるほどの威力だ。

それじゃあな！今日の晩飯くん！

「後方の安全確認」

ん？うわっ危な！？ちようど真横スレスレじゃないか。それにしてもなんだあれ？何か飛んでったように見えるが・・・。

あ、晩飯くんが避けた。って今度は真上スレスレを斧が飛んでった!?

なんでこうも俺の周りにばっかり危険物みたいなのが来るんだ。今日は災難だな・・・。

・・・え？あの斧が地面に刺さった瞬間結構広い範囲の地面に亀裂が出来ただけぞ。しかもその余波で晩飯くんがさつき避けたやつを腕に当ててるって、ハンターでもあんな

芸当できるやついないぞ。

あ、やばい晩飯くんの左腕が吹っ飛んだ！あ、しかも逃げた！待ってくれ！俺の晩飯いいいいいい！

・・・はあ。今日はとことんついてないなあ。俺の周りにばかり危険物みたいなのが来るわ、今日の晩飯も逃げるわ・・・。あーなんかだるくなってきた。早くさっきの場所に戻って寝よー。ブラキのことだしもう簡易的でも完成はしてるでしょ？

・・・?!?なんだこの気配!?!後ろか！

さっきの斧を投げた女か？それにしても人間とは思えないほどの殺気・・・いや、これは「死」の匂い。

どういうことだ？たかだかこんな奴に俺を殺せるほどの力があると？だがここは未知の場所。何が起るかもわからないからな。取り敢えず警戒しておこう。

一步、また一步、歩き方はいたって普通。恐らく武器を取ってすぐ戦闘、ってことはならないと思うが、まだ警戒は解かないでおこう。

武器を取った。次の行動は・・・？何もしてこない？

「初めてね。私を見て逃げ出さない奴なんて。」

は？言葉がわかるだと？一応俺、オスト、ブラキの3人は人の言葉がわかるとはいえ、それはこちらが知っている言語のみ。俺は昔島の周辺を飛んでたのに乗ってた人から



聞いた言語がいくつかあったから、あの2人よりは俺の方がまだ知識がある。それで、それがこの言語である、と考えると、俺たちのいた場所と、ここは、同じ世界にあるってことになる。だったらあの門は異世界への扉、というよりはただ遠い地へ移動させるワープゲートみたいな感じなのか。それにしても俺らの世界にこんな場所があったとは……。

言語が分かるのならコミュニケーションはだいぶ楽になる。うーん、じゃあそうだな、おまえは誰だ？

「あらあ、先ずは自分から名乗るのが礼儀ってものじゃないの？」

それもそうだな、じゃあ俺から。俺の名前はアカム。正式にはアカムトルムって言われる。

「アカムトルム……聞いたことないわね。」

当たり前だろうな。俺がいた場所ですら、知ってるやつもほとんどいないレベルだったし。こっちの自己紹介は終わったぜ。今度はそっちの番な。

「私はロウリイ・マーキュリー。暗黒の神、エムロイの使徒。」

……？へー。よくわかんないけど分かった。なんかスゲー奴なんだな。お前。

ロウリイ「あなた、絶対分かってないわね……。」

は、すまんすまん。で？わざわざなんで声をかけてきた？

ロウリイ「そうそう、すっかり忘れてたわ。あそこに緑色の人たちがいるでしょ？少なくとも私はあの人たちについていこうと思うんだけど、どう？あなたも一緒について行ってみたい？」

いいのか？あの人らには俺もついて行ってみたいが・・・あ！そーいやあと2人ここに来たんだった！そいつらの許可も得ないとない！

ロウリイ「分かったわ。じゃあ許可をもらったらここに来なさい。頑張つて緑の人達に交渉してみるわ。」

分かった。それじゃ俺は戻るぜ。じゃあな。

「ええ、また会いましょう。」

♪ Now loading ♪

オスト「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・

オスト「で？かなり帰りが遅くなった挙句そこであつた奴らの場所に行つてみないか、だど？その場合俺の作つた拠点はどうなるんだ？」

あ、あかんオストさん久々にマジギレてるやつだ。えー・・・サーセンデシター。

♪ アカム説教中 ♪

死んだと思つた。いやマジで。オストさんいきなり最大威力のレーザー撃とうとす

るんだもん。ブラキが必死になってなだめてくれなかったら・・・ブラキ様本当にありますがとうございます。まあ、なんやかんやあつたけど、結局満場一致で行くことになった。そのためにも、気球の奴らからキノコを調達して来てほしいかな。よし、じゃあ一回溶岩島に戻ってくるわ！